

# 北海道文化

素人が「格調の高い文化誌」を発刊することは、かなり難しいことである。私たちは大雪山系黒岳や札幌・藻岩山で索道事業を営んでいる関係上、二年余り前から山の神にちなんだ「カムイミントラ」という名の隔月刊を発刊している。

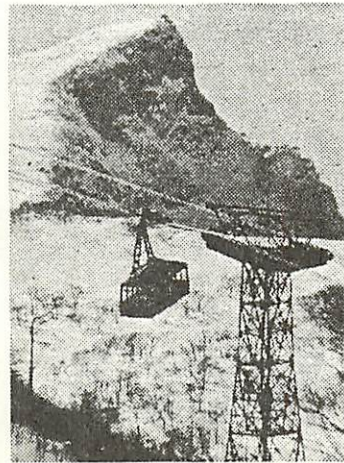
これは、とかく埋もれがちな北海道の風土や文化を掘り起こし、いざさかでもお役に立ちたい気持ちから文化誌を目指しているが、その正体は



植田 英隆

奇数月の一日発行、変形B5判十六頁という小冊子ではない。その内容は道内各地の、特徴あることを読み切り特集で掲載し、読者への参考にしてもらうのが目標である。ちなみに、これまでの主な内容を紹介しますと、創刊号が「大雪山層雲峡・黒岳」で始まり、以下「富良野・東大瀧川林」「江差追分の心を求め」に「中札内村の人へ」・「土づく

## 「カムイミントラ」を発刊して



「神々の遊ぶ庭」カムイミントラを望む大雪山系黒岳

# 石の上にも三年目標

として企業勝致や大きなイベントの開催が声高らかに叫ばれて、今日に至っている。まさにその通りかも知れないが、それだけではあまりにも寂しいと考えたことが第一の前提であった。他人依存でよかれとだけも思っていないわけだから、足元をみつめ、自分なりに出来ることをもっと積極的に取り組む必要がある。もちろん新聞やテレビも北海道の過去、現在、未来について多くの紙面や時間をかけ、確かに優れた意見も数多い。だが、まだ足りないのではなからうか。足りなければ、自分でやってみるのも意味のあることだと

り「北大植物園百年」などがあり、最近の五月号(通巻十四号)では「時代とわたし・三浦綾子」を特集した。

この小冊子の発行について、多くの方から賛問を受けるので、その説明をする。まず発刊のきっかけは、自社の歴史をまとめる中で、ある編集者グループと知りあえたことである。いろいろな話をしているう

ち、北海道を取り上げる定期刊行小冊子の考えのあることを私が口に出し、議論している中で内容が煮つまっていった。

今はなおさらいえるかも知れないが、当時も北海道の将来、とりわけ経済面から見た先行きには、明るい展望が開けているとは思えなかった。実情や実態がわかればわかるほど、そうもいえたであろう。その対応策

判断したが、その出発点となった。このような発想でスタートしたわけだが、その大それた構えとは反対に、実際は手さぐりや試行錯誤の連続で、今日に至っているのが実情である。目玉ともいへば特集が各地を巡り、内容をよく深く掘り下げているのも、その表れで、このため編集者や印刷会社に迷惑のかけっ放し

社長(うえた・ひでたか)りんゆう観光